

もくじ

こいびと——表紙の生産者をご紹介
安佐北区口田南
小池 宏典さん 2

特集
「百歳倶楽部」で、
まさかの時に
備えましょう 4

●JA広島市通信 6
●いきいきレディース 9
●変わるんJA [第43回] 9

あなたの暮らしに支店だより
加計支店 10

教えて! 営農さん
「地力」をつける
土づくりを 11

はじめての家庭菜園
ホウレンソウ 11

JAヘルシークリニック
感染症対策のポイント 12

松田麗子の台所からこんにちは
広島菜漬の
ねばねば和え 12

●わが家のスター 13
●おしゃべり広場 13
●クロスワードパズル 14

●JA広島市 情報BOX 15
●ひろしまる倶楽部 & こいぶみ
農家今昔物語 16



本誌取材時は、新型コロナウイルス
感染拡大防止のため、ソーシャル・
ディスタンスの確保やマスク着用を
行っております。ご登壇いただく方
には、撮影時のみマスクを外していただ
く場合があります。

本誌タイトル「こいぶみ」とは、
JA広島市の気持ちをまっすぐに、
組合員をはじめ多くの人に届けるため、
広報誌を手紙に見立てたところから命名いたしました。
「こいぶみ」の「こい」には、人や地域を愛する「恋」のほか、
多くの人に呼んでもらえる「来い」、
情報が「濃い」など、さまざまな意味を込め表現しています。



農産物の生産・管理を通して 「やりがい」を育む場を創出。



肉厚なシイタケは1週間前後で収穫できるサイズになる。



何度か収穫した後の菌床は、砕
いて野菜畑にまかれる。



夏にはキクラゲの栽培も始めた。
「他のキノコも考えています」



施設利用者、スタッフの皆さんと。



シイタケを育てているハウス。

こいびと——表紙の生産者をご紹介
小池 宏典さん
(43歳)
安佐北区口田南

安佐北区の住宅地にある坂道を上っていくと、里山風景の中に農産物の栽培地が開ける。そこは、小池さんが運営する障がい者福祉施設の就労の場だ。小池さんに、特に力を入れるシイタケ栽培や、将来への思いを伺った。

農地との出会いを機に 一から始めた野菜づくり

農業経験が全くない小池さんが、野菜づくりを始めたのは2019年のこと。運営する障がい者福祉施設の利用者のご親戚から、数年間耕作されてない農地の提供を受けたことがきっかけだった。まずは草を刈り、石を拾うことから始めた。

「施設利用者の皆さんが働く場所をつくりたい、農業を通じて喜びを感じてもらいたい、と考えました」
野菜のつくり方、販路の確保など、農業研修の経験を持つスタッフやJAの営農指導員からアドバイスを受けながら、ナスやピーマン、キュウリ、レタス、キャベツ、ミズナなど、季節ごとに収穫できるよう少量多品目の栽培を始めた。収穫した野

高い品質の維持・管理が 仕事へのやりがいを生む

「シイタケはないの?」。野菜の購入者からの要望が契機となり、シイタケの菌床栽培が始まった。400個ほどの菌床を置く栽培部屋をつくり、最適な温度や湿度の検証を重ねた。2021年7月には野菜畑の横に専用のビニールハウスを設置。週に100kgを出荷するまでになった。「葉物野菜などに比べて収穫や仕分けがしやすく、障がいのある方でも仕事を担当できる。年間を通じて出荷できることも魅力でした」

施設の運営に携わる前は、製造業に従事していた小池さん。農作物の栽培・収穫・仕分けや、作業全体を見渡しての適材適所の人員配置など、前職での工程設計の経験が役立つ。特に気を配るのは、出荷時の品質管理。キズの確認に始まりサイズごとの袋詰めまで、ばらつきな

「高い品質を維持している。」「JAに出荷できることで、作業する皆さんが燃えるんです。社会に通用する高品質のものづくりを通して、皆さんのやりがいが生まれています」

目的を共有し絆を深める 場所の創設を目指す

小池さんの夢は、生産した農産物の食品加工場をつくることだ。障がい者や職場をリタイアした高齢者の方などが「良いものをつくる」という目的を共有することで、絆を深めることができる場所の創設を目指している。わずか1年ほどでシイタケづくりを軌道に乗せた小池さん。その思いは将来に向け、大きく広がっている。

My History

マイ・ヒストリー

2013年 仕事を辞め広島に戻り福祉の道へ。
2019年 農業を始める。

